日本剣道KENDOの国際展開への課題

～韓国剣道との相克を中心に～¹

小 田 佳 子 (東海学園大学)²
近 藤 良 享 (中京大学)³

Abstract

In this study we would like to focus on Korean KUMDO which has represented a significant rise in the international KENDO world since 1990.

The purpose of this study is to indicate the direction of the international expansion of Japanese KENDO through the following two points of view, while clarifying the conflict and the course between Japanese KENDO and Korean KUMDO. One point is an approach toward cultural universalism, which means that Japanese KENDO should be transmitted to the world and root in other countries as itself, and the other is an approach to cultural relativism, which means that not only Japanese KENDO but also other KENDO from other countries should be admitted with mutual approval of cultural properties. This discussion consists of the following 3 parts:

1. Conflict between Korean KUMDO and Japanese KENDO
2. Trend in the international KENDO world
3. Challenges for the international expansion of Japanese KENDO

On the basis of the course and the conflict between Korean KUMDO and Japanese KENDO, KENDO takes the position of cultural universalism, on the other hand KUMDO has the position of cultural relativism and it tries to find a way to internationalize KUMDO for their competition.

For the international expansion of KENDO, it is inevitable to construct the Modern KENDO by reconstructing Japanese KENDO with reviewing the tradition of KENDO thoughts and its principle, objectify and verbalization of KENDO skills and referees, while taking consideration of the different cultures, not just a KENDO spread abroad by ambiguous domestic recognition.

Key words: KENDO, International spread, Internationalization, Cultural universalism, Cultural relativism

キーワード：剣道，国際的普及，国際化，文化普遍主義，文化相対主義

¹ The challenge for the international expansion of Japanese KENDO -From the conflict between Korean KUMDO and Japanese KENDO-

² Yoshiko ODA, Tokai Gakuen University, 21-233 Nishinohora, Ukigai-cho, Miyoshi-city, Aichi, Japan. 470-0207

³ Yoshitaka KONDO, Chukyo University, 101 Tokodachi, Kaizu, Toyota-city, Aichi, Japan. 470-0393

はじめに

武道の国際展開をめぐるのは、1964年の第18回東京大会でオリンピック競技化された柔道（男子）と、現在もオリンピック競技ではない剣道とを比較すると、明らかに異なる方向を歩んでいる。柔道について、坂上は「柔道は現在、世界190カ国以上でおこなわれ、愛好者は1千万人を超えている。オリンピックの正式種目となって約50年、もはや押しも押されもしない世界屈指のメジャースポーツとなった」¹⁾とし、また「フランスでは学校体育に取り入れられ、エストニアの高等教育やポーランドの一部では体育の必修教科にもなっている。(中略)それは、ローカルな日本の文化が国境を越えて地球規模で伝播し、人類の共有財産となったという、痛快なサクセス・ストーリーにほかならない」²⁾と賛辞をおくる一方、柔道が国際化されJUDOとなったことにより、日本武道であったはずの柔道は、「人間形成の道」という日本の文化的特性を喪失し、換骨奪胎された異質の身体運動文化・スポーツへと変容したというネガティブな面も報告している。

これを他山の石として、日本の剣道界は、剣道こそが日本の武道であり、世界に誇るべき日本の伝統文化であることを誇り高く矜持する方向性を示している。しかしながら、改めて「剣道の何が世界に誇るべき日本の伝統文化なのか」を問うと、明確に示されているとはいえない。後述するように、自明のままに日本から船出した剣道は、国際的にはKENDOとして1970年に国際剣道連盟(FIK)が発足し、第1回世界剣道選手権大会(WKC)が日本で開催されている。それ以来、世界各地で剣道競技大会が開催されるようになり、愛好者は増加の一途を辿っている。その一方で、剣道という身体運動文化は、未だに武道とスポーツの狭間を浮遊し、両立困難な剣道の理念・思想と競技性が相克している状況にある。また視点を変えてみる

と、日本の伝統文化としての理念・思想が、「日本剣道の国際的普及」というナショナリズムと、「剣道の国際化」をめぐるグローバリズムの間で摩擦・軋轢を生じさせているとも言えるだろう³⁾。このような状況下、今日の「日本剣道の国際的普及」は、多くの課題や問題点をはらみ、今こそ現代の剣道はどのようにあるべきか、その真価が問われているといえるのではないだろうか。

剣道の国際化や国際的普及の現状及び課題についての先行研究⁴⁻¹⁴⁾を概観すると、このような問題意識は1980年頃から散見されるようになり、近年では、剣道の海外への伝播・普及に伴って、「武道とは何か」、「剣道とは何か」という本質を問うようなシンポジウムやフォーラムが開催されるようになってきている。たとえば、2003年には「21世紀の日本武道の行方 - 過去・現在・未来」と題した国際シンポジウムが開催され、ベネットは「剣道の黒船 - 韓国」¹⁵⁾において、剣道の海外普及と韓国の台頭という視点から、オリンピック競技化の問題を提議している。また、2008年には日本武道学会創立40周年記念大会において「武道の国際化に関する諸問題」と題したシンポジウムが開催され、その中で、国際剣道連盟副会長であった福本は、「剣道の海外普及の現状と今後の課題について」¹⁶⁾と題し、競技性に安易に妥協しない武道としての道を追求する見解を示している。志々田は「武術・武道の国際化と文化変容に伴う諸問題」¹⁷⁾と題し、日本武道のグローバル化に起因する文化変容の問題点を指摘しつつ、日本武道の思想的特性について触れている。長尾は「剣道における国際化の問題を考える」¹⁸⁾の中で、審判の問題や剣道のオリンピック競技化の是非を問い、ニーズに応じた指導の必要性や当該国・地域の文化・事情への配慮を説いている。

これらの先行研究や議論の中で、特に、ベネットが「剣道の黒船」と称した韓国剣道界の動向が注目される。すなわち、韓国剣道界が目

指すのは剣道の「国際化」であり、日本の伝統文化である剣道の「国際的普及」とは異なるという点で、まさに剣道の今後の方向性を左右する可能性がある。従って、韓国剣道界の内実を明らかにすることが、日本剣道 KENDO の今後の方向性にとって重要である。そして、その前提として、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の歴史と現状について、精緻に把握しておくことが不可欠となる。

この視点で韓国剣道 KUMDO に関する先行研究に注目すると、金¹⁹⁾の韓国剣道ナショナルチーム選手の意識調査や、井島・岩切ら^{20,21)}の国際武道大学と韓国の龍仁大高校との学術・スポーツ交流を通じた韓国における剣道に関する意識・実態調査がある。これらはいずれも世界選手権大会における韓国チームの競技力の顕在化による韓国人選手の実態把握に焦点を絞った研究である。また、加藤の「韓国から見た剣道の国際化」²²⁾や、安藤の「韓国における学生剣道に関する研究」²³⁾は、韓国剣道界の現状を示唆しているが、韓国剣道 KUMDO の文化的特性や対日本剣道 KENDO とのヘゲモニー（主導権）争いを扱った研究は、まだ十分に行われているとはいえない。

そこで本研究では、韓国剣道 KUMDO の国際的な台頭に着目しつつ、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO のこれまでの歴史的経緯や対立点を明らかにした上で、「文化普遍主義」と「文化相対主義」という2つの視点から、日本剣道 KENDO の国際展開はどのようにあるべきかについて、その方向性を探求することを目的とする。

青木²⁴⁾によると、ボアズやベネディクトに代表されるアメリカの文化人類学者が中心となって提唱した「文化相対主義」は、いかなる文化も、独自の、その文化内で自律する価値を有する立場をとる。これに対して、「文化普遍主義」は、ある特定の文化で成立した価値観をもって他の文化を一方的にとらえる立場であ

る。つまり、日本剣道と他国の文化的特性に基づく、国際的な広がりを持つ剣道の相互承認の試みとなる「文化相対主義的な方向性」と、日本剣道そのものを世界に発信、定着させようとする試みとなる「文化普遍主義的な方向性」から、日本剣道 KENDO の今後の方向性を検討することである。

1. 韓国剣道 KUMDO と日本剣道 KENDO の対立

現在、日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO が、そのヘゲモニー（主導権）をめぐる宗主国論争²⁵⁾とも言える状況にある。その状況を端的に示すものとして、例えば、国際剣道連盟（FIK）に加盟する韓国の大韓剣道会（KKA）の専務理事は、「現代剣道は日本によって形成されたと認める人はいるが、この剣道をさらに発展させ、また理論的な面や競技力の面で日本を凌駕する実力を備えていくことが、我々のなすべきことだと考える。それが、真の宗主国の地位を取り戻すことだと思う。」²⁶⁾と、宗主国奪還と言える声明を出している。これに対し、全日本剣道連盟（全剣連）は、「最近、インターネット上で『剣道の起源は日本ではなくて韓国』という記述がしばしば見かけられるが、（中略）改めて我々の見解や方針について広く知って頂く必要がある」²⁷⁾と前置きし、韓国剣道界の動向を意識して、「剣を扱う技術は世界の各地で生まれ、確立されてきた。しかしその中で、我々が行っている剣道とは、＜剣道の歴史＞にも記されているような日本で育った歴史的背景をもった剣道を指している。」²⁷⁾と、日本の武道・伝統文化としての剣道こそが正統という対抗的な立場を明示している。

このような剣道のヘゲモニーをめぐる状況は、互いの主張を応酬するに留まり、平行線をたどる可能性が高い。この宗主国争いの状況に終止符を打つには、双方の歴史を丁寧に追ひ、

その現状を踏まえ、解決の方向性を模索することが今後の重要な課題と考えられる。

1-1. 韓国剣道(KUMDO)の歴史と正統性の論理

韓国では、1910年から1945年の第二次世界大戦終了まで続いた日本化政策を、韓国独自の文化が失われた日帝強占期²⁸⁾の時代と捉えられている。この1910年の日韓併合は、主に朝鮮半島をめぐる大日本帝国と清国の権力争いであった日清戦争(1894~1895)及び、大日本帝国とロシア帝国の間での朝鮮半島をめぐる日露戦争(1904~1905)に起因している。このロシア帝国に対する大日本帝国の勝利が、日本の帝国主義をより強固なものとし、1910年の日韓併合へと至った。戦後67年が経った今もなお、両国の間には支配と被支配という歴史に起因する大きな溝が存在し、特に韓国側の対日感情は、竹島や従軍慰安婦といった問題を政治論争として激化させている。韓国政府が実施している歴史教育における反日教育がその根底を支えていることは周知の事実である。この教育政策が韓国剣道界にもそのまま影響を及ぼし、韓国全域に及ぶ修正主義派²⁹⁾の間で、剣道は、決して日本の伝統文化ではなく、元来、韓国の伝統文化であると主張する者も少なくない³⁰⁾。

朴³¹⁾は、韓国における剣道の歴史について、その具体的な内容の確証は難しいとしながらも、剣道が1896年に軍隊と警察で始まったとする。また、金³²⁾も同様に、1896年の警務庁や1904年の陸軍研成学校の撃剣教育として日本から剣道が導入されたとしている。

当時の資料を確認すると、「1896年1月11日に武官学校の官制が公布されて、それを契機に1904年、陸軍研成学校が建てられた。この陸軍研成学校は日帝強占期以前の公立学校として、現在の総合行政学校に該当する将校たちの再教育機関であり、体操と剣術などの授業があった」³³⁾と記されている。また、『大韓體育史』において、「高宗実録健陽元(1896)5月23日の

記録から、1896年より警務庁では撃剣を購入していたことがわかる。すでに警察の剣道教習が行われていたことを意味するとも言える。」³⁴⁾と記されている。その後、1904年9月27日、陸軍研成学校は、戦術科、射撃科、体操剣術科を置き、これらに熟練するよう教育を改め、剣道は軍警の間で徐々に芽生え始める³⁵⁾。そして、1914年6月10日、朝鮮総督令第27号「学校体操教授要目」において「撃剣及柔術」が導入され、従来の韓国の体育政策は無視され、日本化体育政策が確立されるに至る³⁶⁾。さらに、韓国の学校で最初に剣道部が開設されたのは、1916年5月私立五星学校であり、剣道施設を備え、一般青年にも指導したと報告されている³⁷⁾。

つまり、韓国における剣道は、日清戦争(1894~1895)に始まり、日露戦争(1904~1905)、そして1910年の日韓併合へと至る朝鮮半島における大日本帝国による日本化政策の一環により、1896年から警察、軍隊、学校の順で導入されたことが示唆される。さらに、日帝強占期の朝鮮教育令による、柔道と剣道の学校体育への導入の意義³⁸⁾は、当初は朝鮮居住の日本青年の心身修練や人格形成にあったが、1919年の3.1運動勃発以降は、日本が植民地政策を武断統治から文化統治へと移行させ、特に、1922年に公布した第二次朝鮮教育令により韓国人と日本人との教育上の平等化が図られることとなった。

ここで留意すべきは、先に確認したように、韓国における剣道の導入は、日本剣道 KENDO をそのまま定着させようとする「文化普遍主義的」というよりも、むしろ侵略国からの異文化の押しつけ、つまり「文化帝国主義的」なそれであったという点である。この点は、戦後、西欧における東洋文化の神秘的憧れの1つとして日本剣道 KENDO が伝播していった経緯や、南米や北米における日本からの移民による母国への郷愁を伴う剣道の普及とは、全く性質が異なることを確認しておかなければならない。

こうした歴史を背景に、韓国では剣道を含めて日本文化に対する拒絶反応があり、植民地支配下の負の文化遺産を払拭するためにも、日本剣道 KENDO ではなく、韓国独自の文化・歴史に根差す剣道 KUMDO の正統性の主張が出現しているのである。その典型例が、第39回全国学生剣道大会プログラム（2010）の中で、大韓剣道会（KKA）が唱える「剣道の歴史」³⁹⁾に示されている。そこには、日本が発祥であるとされる剣道の「刀」は韓国からその技術が日本に伝えられ、新羅時代には花郎と呼ばれる武士が活躍し、現代剣道の基盤となる世界最古の剣法である「本國剣法」を確立したとされている。つまり、日本は朝鮮（韓国）から刀及び剣術文化を受け入れ、後にその剣術が撃剣・剣道へと繋がり、現代剣道をスポーツとして確立させたと言う。また、オリンピック競技のフェンシングを例に出し、剣道をスポーツ化、国際化する方向性を示唆しつつ、韓国剣道 KUMDO の正統性を主張する姿勢を貫いている。大韓剣道会（KKA）はこのような歴史認識を学生剣道大会のパンフレットに記載し、次世代の若者らに対し、その歴史教育から剣道の起源が韓国にあることを広く根付かせようと、啓蒙策を進めている。

1-2. 「剣道」という用語の成立時期をめぐって

日本も韓国も「剣道」と表記するが、韓国語（ハングル）では **검도** と表記し、これを KUMDO（コムド）と読む。日本における剣道という用語の成立について確認すると、まず、1919年6月6日に、大日本武徳会が「剣道試合二関スル心得」を制定し、同年8月1日に大日本武徳会が「武術」とあるものをすべて「武道」に改める通知を出し、剣道、柔道、弓道に統一されたという史実⁴⁰⁾がある。また、日本武道学会剣道分科会編『剣道を知る事典』付録の剣道関係文献一覧⁴¹⁾によると、「剣道」を冠する著書には、まず1860年の加藤田重秀『剣道初学須知』があり、1909年に宮本武蔵著・三橋監

一郎注『剣道秘要』、1910年に小関教政『剣道要覧』、1911年に柳多元治郎『剣道教範』、さらに、1915年に高野佐三郎『剣道』が発刊されている。そして、1920年以降は、ほぼ「剣道」が用いられている。つまり、日本では1900年を前後して、撃剣、剣術、剣道といった用語が混在する時期がある。そして、1919年に、大日本武徳会が「剣道」として用語を統一し、それ以降、「剣道」という用語が定着していったと考えられる。

一方、韓国における剣道という用語の成立について、ベネットは、「1908年には、韓国と日本の間で最初に警察官撃剣大会が開催された。（中略）1910年頃、撃剣という用語は剣道（コムド）という新しい用語に変わったと書いているが、日本では剣道（ケンドウ）になったのは、1919年8月1日（『大日本武徳沿革玄』『会報』第24号より）と記録されている」⁴²⁾と提示している。つまり、日本では1919年から公式に「剣道」という用語が用いられたのに対し、韓国では1910年頃にはすでに「剣道」という用語が用いられていたと主張されている。しかし、韓国側の主張する1910年頃には「剣道」という用語が成立していたとする論拠が全く示されていない。その一方で、この主張に依る1910年が、日韓併合の年であり、この年を指摘する韓国側の主張の意図が伺われると同時に、この歴史と前後して、撃剣から剣道へとその用語の変容が両国間において生じたと推察される。ここでは、「剣道」について、どのような用語や読み方であったかが問題なのではなく、まさしく現代に繋がっている剣道（撃剣・剣術）が、1910年頃には日本から韓国に導入され、日本でも韓国でも同じ剣道が実践されていたという事実だけを確認しておきたい。

1-3. 日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO の競技上の相違

競技という視点から、現在の韓国剣道 KUMDO

をみると、日本剣道 KENDO との相違は一見したところ見出されない。もちろん、世界剣道選手権大会 (WKC) は、国際剣道連盟 (FIK) の試合規則・審判規則に従って実施されるため、公式競技上の相違点はない。しかし、韓国剣道 KUMDO には、国内規定として「大韓剣道会剣道競技規則」があり、そこには以下のような相違点がある。

- ・ 剣道用語はすべて韓国語を用いる。たとえば、竹刀は *jukdo*、面は *homyun*、胴は *gap*、小手は *howan*、防具は *hogoo* である。さらに、打突に伴う発声の際には、面は *mori*、小手は *sonmok*、胴は *hori*、突きは *zirum* である。
- ・ 審判旗は、日本が紅白であるのに対して、韓国では青白である。
- ・ 試合や稽古などを行う際、蹲踞などの日本で重んじられる礼法を省略する⁴³⁾。
- ・ 韓国の袴は、日本で用いられる剣道袴の紐や結の文化を簡易化し、マジックテープで留め、腰板のないものを着用する。
- ・ 昇段審査では、国際剣道連盟の審査内容に加えて、韓国の古流剣法である本國剣法を実技審査し、韓国独自の昇段審査方法をとる。

さらに特筆すべきは、韓国では、これまでも重大な決定場面の誤審疑惑が発生するたびにその導入が検討されてきた「映像判読訴願」が、2011年4月の韓国実業剣道連盟 (KBKF) 主催の「第15回全国実業剣道大会」(韓国京畿道南楊州市)において初めて導入されたとする加藤⁴⁴⁾の報告である。この「映像判読訴願」とは、チーム監督が審判の判定に対して訂正を求める権利のことで、映像機器で記録した動画を第三者が判読し、判定を下すものである。この映像判定による審判の判定に対する訂正権は、世界を含めた日本剣道界にとっては、有効打突を見極める三審制自体を問う大きな試行である。

なぜなら、それは韓国剣道 KUMDO の国際化のための課題克服、すなわち、オリンピック競技化への布石ともいえるからである。これは「判定の客観性」を志向すれば、世界各地の剣道大会に導入される可能性がある1つの判定方法である。

この他に、8月15日の独立記念日に実施される全国学生剣道大会(小学生から大学生まで参加する全国大会)は、韓国全土に生放送される⁴⁵⁾。大会会場も祝賀ムードで華々しく、よりメディア化され、観客を意識した独自の演出がみられる。ここに、日本ではほとんどメディアに登場しない剣道のメディアを利用した普及、啓蒙活動が看取できる。

2. 国際的な剣道界の動向

この節では、まず、国際的な剣道組織・大会の沿革、次いで競技レベルでの日本剣道 KENDO と韓国剣道 KUMDO との宗主国争いを考察する。

2-1. 日本主導の国際剣道連盟組織

剣道の国際的組織・大会について概説すると、1970年に国際剣道連盟 International Kendo Federation (発足当時は IKF、現在は FIK に略称変更)は、「剣道の国際的普及振興をはかり、合せて剣道を通じ加盟団体相互の信頼と友情を培うことを目的とする」⁴⁶⁾という規約第6条を掲げ、日本が主導して発足した。発足当時の加盟団体は、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、フランス、ドイツ、イギリス、韓国、モロッコ、オランダ、中華台北(台湾)、スウェーデン、スイス、アメリカ、日本の15カ国、およびハワイ・沖縄の2地域の計17団体(ハワイ・沖縄は総会の特別決議による)であった。FIKの初代会長には、全剣連の木村篤太郎会長が就任し、以降2012年現在に至るまで、歴代の全剣連会長が、FIK会長に選任されている。このことから、FIKは全剣連が主

導してきた国際組織であることは明白である。

このFIK創設の経緯⁴⁷⁾については、1964年10月の東京オリンピック大会で、剣道は、弓道、相撲とともにデモンストレーションを行い、世界の表舞台に初めて立ち、その翌年から、国際社会人剣道大会、国際親善剣道大会が開催されるに至り、世界的組織の結成と大会の実施を求める気運が高まったとされている。特に、米国代表の森寅雄による剣道の海外普及への熱意がその背景にあったという。すなわち、森の提案によって、全剣連が特別委員会を設置し、連盟結成の趣意書と規約案を作成し、1970年に上記17団体による創立総会(東京)が開催され、FIKが発足した。その規約によると、各国・地域連盟代表による定期総会を3年に1度開催し、理事会は、19名の理事(会長と副会長4名を含む)と2名の監事で構成され、毎年1回開催するとされている。2007年の時点で、日本からは7名の理事が選出されている。FIKの主な業務には、世界選手権大会(WKC)の開催、およびその関連事業として、各連盟の審判員を対象とした審判講習会があり、各ゾーンごとに年1回開催され、WKC審判員には、この受講が義務づけられている。また、各連盟間の剣道事情の情報交換も行っている⁴⁸⁾。

また2006年4月にFIKは、国際オリンピック委員会(IOC)に承認されている国際競技団体連合(GAISF、現 Sport Accord)に加盟し、同時にその略称は、IKFからFIKになった。このGAISF加盟について高橋⁴⁹⁾は以下のように語っている。

GAISFは各種スポーツの国際競技連盟などで構成され、IOC(国際オリンピック委員会)加盟に向けた登竜門といわれる。この加盟によって政府から財政的な援助を受けることができた国もある。何よりもFIKが唯一の国際競技団体として認証されたということは、同時に今後の剣道の方向性にも大きな影

響と責任を背負うことでもある。

GAISFに加盟したことによって、FIKは、国際スポーツ団体としての認可を受け、KENDOという用語・呼称が国際的に認知されたという意義がある。しかし、他方では、他の国際スポーツ競技団体からの外圧も受ける立場になったことである。つまり、スポーツアコードには様々な国際スポーツ競技団体が加盟しているが、そこで開催されるワールドゲームズの競技内容や種目をめぐっては、他競技との関連からFIKが意図しない主旨での大会開催や、種目要請が出現する可能性があるということである。一般的に、オリンピック競技のようにスポーツを国際化するためには、異人種、異文化間における共通理解が求められることになるが、剣道は日本の文化性が色濃い基盤の上で実践されている身体運動文化であり、その本質特性を変容させることを全剣連は望んではいない。つまり、日本の身体運動文化のスポーツ化によって、日本剣道の伝統的文化性が希薄になり、いずれ消滅することが懸念されている。その意味で全剣連が主導するFIKは、組織の基本方針や運営を含め、大きな岐路に立たされていると言えるだろう⁵⁰⁾。

2-2. 世界剣道選手権大会(WKC)における競技成績の変遷

1970年のFIK発足と同時に、第1回世界剣道選手権大会(WKC)が日本で開催された。その後、3年に1度、WKCは開催され、2012年のイタリアで第15回大会を迎えた。表1の「世界剣道選手権大会参加状況と大会結果」に示したように、韓国の躍進ぶりには目を見張るものがある。日本対韓国の決勝戦は1988年から2003年まで6回連続し、いずれも日本が優勝しているが、2000年以降の第11回、第12回大会では、僅差となっている。そして2006年の第13回大会では、準決勝で日本を破ったアメリカを降した韓

国が念願の初優勝を果たした．第14回大会では，日本が王座を奪還し，準決勝で日本に敗れた韓国が3位となっている．そして，2012年の第15回大会では，男子団体決勝で日本が韓国を

表 1：世界剣道選手権大会 (WKC) 参加状況と大会結果 (2012, 小田⁵¹⁾)

大会数	西暦・年号	開催地	男子団体決勝	団体結果	参加国・地域 (参加者数)	団体戦 (チーム)	男子個人 女子個人	備考 (女子団体結果)
第 1 回	1970 昭和 45 年	日本 東京・大阪	日本 4-0 中華台北 (台湾)	1 位: 日本 2 位: 中華台北 (台湾) 3 位: ブラジル・沖縄	17 (144 名)	11	128 名	
第 2 回	1973 昭和 48 年	アメリカ ロサンゼルス・ サンフランシスコ	日本 4-0 カナダ	1 位: 日本 2 位: カナダ 3 位: アメリカ・ハワイ	16 (100 名)	15	57 名	1 カ国個人出場枠 7 名
第 3 回	1976 昭和 51 年	イギリス ミルトンキーンズ	日本 5-0 カナダ	1 位: 日本 2 位: カナダ 3 位: アメリカ・台湾	20 (215 名)	17	115 名	
第 4 回	1979 昭和 54 年	日本 札幌	日本 4-0 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: アメリカ・ハワイ	21 (285 名)	18	126 名	
第 5 回	1982 昭和 57 年	ブラジル サンパウロ	日本 4-1 ブラジル	1 位: 日本 2 位: ブラジル 3 位: アメリカ・韓国	20 (300 名)	14	94 名	IFK 加盟 25 カ国中 8 カ国欠場
第 6 回	1985 昭和 60 年	フランス パリ	日本 3-0 ブラジル	1 位: 日本 2 位: ブラジル 3 位: 韓国・カナダ	25 (490 名)	23	145 名	
第 7 回	1988 昭和 63 年	韓国 ソウル	日本 3-1 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: カナダ・ブラジル	23 (360 名)	21	(156 名)	
第 8 回	1991 平成 3 年	カナダ トロント	日本 5-0 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: カナダ・台湾	29 (471 名)	26	186 名	IFK 加盟 29 カ国 30 団体
第 9 回	1994 平成 6 年	フランス パリ	日本 4-0 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: カナダ・台湾	32 (550 名)	32	197 名	親善試合 (日本人以外) 約 200 名参加
第 10 回	1997 平成 9 年	日本 京都	日本 2-1 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: ブラジル・台湾	34 (436 名)	1 部 12 2 部 21	(192 名)	1 カ国個人出場枠 5 名 男子団体 2 部リーグ実施 女子団体 (3 人戦)・個人国際 選抜試合
第 11 回	2000 平成 12 年	アメリカ サンタクララ	日本 2-1 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: カナダ・ブラジル	36 (522 名)	男子 30 女子 18	177 名 108 名	女子団体結果 1 位: 日本 2 位: ブラジル 3 位: アメリカ・カナダ
第 12 回	2003 平成 15 年	イギリス グラスゴー	日本 1-1 韓国 (代表戦: 栄花ツ)	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: イタリア・アメリカ	41 (585 名)	男子 36 女子 20	199 名 124 名	女子団体結果 1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: カナダ・台湾
第 13 回	2006 平成 18 年	台湾 台北	韓国 2-0 アメリカ	1 位: 韓国 2 位: アメリカ 3 位: 台湾・日本	44 (586 名)	男子 39 女子 21	166 名 94 名	女子団体結果 1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: ドイツ・カナダ
第 14 回	2009 平成 21 年	ブラジル サンパウロ	日本 4-0 アメリカ	1 位: 日本 2 位: アメリカ 3 位: 韓国・ブラジル	39 (587 名)	男子 35 女子 19	156 名 104 名	女子団体結果 1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: アメリカ・ブラジル
第 15 回	2012 平成 24 年	イタリア ノヴァラ	日本 2-1 韓国	1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: ハンガリー・アメリカ	49 (783 名)	男子 47 女子 30	190 名 132 名	女子団体結果 1 位: 日本 2 位: 韓国 3 位: ドイツ・ブラジル

制し優勝した。また、男子団体のみならず、女子団体に至っても過去連続4回の決勝が日韓対決であった。このように日本と韓国の競技レベルの拮抗が、韓国の発言力の高まりとなり、国際組織としての宗主国争いを激化させている一要因ともなっている。

2-3. 韓国剣道 KUMDO のオリンピック競技化志向

韓国剣道界は、KUMDOをオリンピック競技にする方向性を明確に打ち出している。剣道のオリンピック競技化の是非をめぐることは、剣道界で議論されるようになって久しいが、元々、1980年代前半に大韓剣道会が中心となってオリンピック競技としての採用に向けて努力すべき旨の主張をFIKに行ってきた経緯がある⁵²⁾。さらに、FIKには所属していない韓国剣道 KUMDO の団体である韓国剣道連盟 (KKF) が、2001年9月にFIKに対抗する世界剣道協会 (WKA) を創設し、韓国剣道 KUMDOをテコンドーに次ぐ第二のオリンピック競技とすることを目指すことを発表した⁵³⁾。韓国にWKAが発足し、その目標にKUMDOのオリンピック競技化を掲げたことを受け、志々田は、この「韓国剣道界の台頭による日本剣道の相対化にどう対応するか」⁵⁴⁾という問題を提起している。

韓国には、国家が主導してオリンピックや世界大会で活躍するエリートスポーツ選手の育成制度がある。この国家政策を第一政策とした朴正熙政権 (1962～1972) により「体育特技者制度 (1972)」が法案化され、剣道が再び学校体育の種目として復活した経緯がある⁵⁵⁾。結果的に、1988年のソウル・オリンピック大会での韓国のメダル獲得数は33個、世界第4位であった。以来、韓国ではエリートスポーツ選手に対する特待生制度 (スポーツ特待生の大学入学制度) や、兵役免除制度 (国際大会での男子エリート選手に対する兵役の免除) や、年金制度 (オリンピックや世界選手権などで上位入賞し

た選手に対するポイント制の生涯年金支給) が保障されており、それは剣道界も例外ではない。

また、これらの国家代表選手が参加する世界大会では、勝利至上主義とともに、克己思想の顕在化が見られる。このような状況で、「剣道はもはや日本だけのものではない。スポーツ競技として既に現代剣道の国際化が進んできた以上、剣道は国際的に理解される普遍性を備え、オリンピックというスポーツ共通の平和の祭典の舞台に加わるべき」⁵⁶⁾ という立場を支持し、韓国剣道 KUMDO がオリンピック競技化に消極的な日本剣道 KENDO に代わってオリンピック競技化を要請することは当然のことである。

3. 日本剣道 KENDO の課題

3-1. 日本剣道 KENDO の方向性

塩入は、「武道の国際化」⁵⁷⁾ について、以下の2つの方向を示唆している。1つは、理論や方法が一般化・普遍化していく過程の意味で、国際的に公認された一定のルールに従って競技が行われるようになることである。例えば、柔道の JUDO としてのオリンピック競技化である。もう1つは、人類が世界文化という1つの新しい単一文化を形成するのではなく、それぞれの民族や国民によって形成された文化の独自性・固有性を尊重して、その多様性を認めることである。換言すると、日本の伝統文化としての剣道の独自性を残す形で、国際大会を実施する方向である。これまで日本剣道界は、後者の日本民族によって形成された文化の独自性・固有性を尊重することを基盤とした上で、形成された日本剣道 KENDO をその文化普遍主義的な方向性で海外普及してきたと言える。

この点について、1981年にFIK事務総長の笠原利章⁵⁸⁾ が、「剣道国際化の現況と未来像」という論考において、全剣連とFIK双方のとりべき姿勢として以下の6つを示している。

1. それぞれ固有の民族性と伝統文化を誇る異国の人たちに日本剣道を押し付けられない。
2. 剣道の日本精神性が異国人に理解できるかが難しい。
3. 剣道の特性に共感しそれぞれの角度から真の剣道を教えて、我々日本人の理解に近づける。
4. オリンピックの種目への併合による日本剣道の変容が懸念される。
5. 剣道の国際化は海外の剣道愛好者に正しい剣道を厳しく伝達し、彼等によってそれぞれの国の土壌に剣道が根づくようにする。
6. 剣道を通じて各国民間の連帯と友好を深め、世界平和へのささやかな支えとなるようにする。

この笠原の考え方は、FIK 発足から現在に至るまでの40年余り、FIKの姿勢として受け継がれている。つまり「文化普遍主義的な方向性」で、日本剣道 KENDOを理解する人々に対してのみ、海外に普及し、正しい日本剣道 KENDOの発展を遂げたいとする考え方である。全剣連は、あくまでも日本剣道 KENDO そのものを世界に発信し、日本の伝統文化としての剣道を定着させようとする姿勢を貫いている。そのため、現段階では、事実上、日本が主導権を握る FIK が主催する WKC において、日本の伝統文化としての剣道がその独自性を残す形で展開されている。この背景には、FIKの最大勢力であるヨーロッパ剣道連盟 (EKF) の影響力が大きい。彼らは、日本の伝統文化である剣道 KENDO に敬意を表し、剣道の競技性よりもむしろ文化性に傾倒し、その文化性から何かを学ぼうとする姿勢がある。それを証明するかのように、彼らの大多数は、全剣連が主催もしくは後援する各ゾーン別剣道連盟の六段以上の高段位審査を受験する⁵⁹⁾。

全剣連としては、剣道の積極的な国際化を回避し、オリンピック競技への参加を「非」としてきた経緯がある。その背景には、日本における柔道のオリンピック競技化、国際化に伴う JUDO への変容と、それに対する柔道本来の姿への回帰の訴えという状況がある。この問題について坂上は、柔道と柔術の伝播の視点から、その受容と変容をめぐる多様性とダイナミズムを説いている。すなわち、「主役は、やはり受容する側 (= 現地の人々) であり、彼らの意思とその背景にある社会や文化のあり方が柔道・柔術を変容させ、自国文化としてその国に定着していく。そのあり方は実に多様であり、この段階で柔道・柔術は、異文化の『混合物』となる」⁶⁰⁾。坂上の論をまとめると、国際化の過程で日本の伝統文化が、異文化との混合物となり、変容することは文化人類学の知見からも必至である。よって、オリンピック競技化による日本剣道 KENDO の変容を恐れ、剣道文化の「換骨奪胎」を懸念する理由がここにある。長尾⁶¹⁾ もまた、オリンピック競技化に消極的な主張の主要な論点の1つとして、日本剣道 KENDO の文化性の棄損を挙げている。

3-2. 文化変容への対応

文化変容について長尾は、「ひとつの文化が他の文化と長期にわたって接触すれば、そこに『文化変容』が起こることは当然の帰結であり、剣道や武道もその例外ではない。むしろ『文化は変容しうるもの』という認識に立ち、互いを尊敬・尊重しながら最大公約数の部分を見出す努力が肝要であろう」⁶²⁾と指摘する。この指摘の通り、剣道という伝統文化が、国際的普及として他国に渡ったとしても、当該国の宗教や信仰、習慣に関わる異文化に触れ、異文化に浸透すればする程、その「文化は変容する」のである。この前提に立てば、「文化普遍主義的な方向性」の維持や継承は困難であると言わざるを得ない。

三橋によると、剣道は日本古来の剣術の修練をスポーツ形式で行うものと位置づけられ、「現代の剣道は日本古来の剣術を基盤にした伝統スポーツであって、日本刀に代わる『竹刀（しない）』を用いて約束部位を打突し合う競技であるから、剣道は、日本民族の創造による平和を理念とした遺産スポーツである」⁶³⁾としている。

また、阿部も、「武道は日本的スポーツ」と明言した上で、武道の国際化について、「武道は、狭いナショナリズムの殻に閉じこもることなく、外来スポーツも十分その価値を認めていく立場をとっていく必要がある。武道至上主義的な我田引水の態度は厳に慎まなくてはならない。そして、武道は過去の封建的なものから完全に脱皮し、民主主義の原理に立脚したものでなければならない。」⁶⁴⁾と、剣道のスポーツとしての競技化と国際的な剣道の相対化を提唱している。

さらに、ベネットは武道の固有性をことさらに強調することは「文化帝国主義」や「エリート主義」に繋がりがかねない面をもっており、「世界中にすでに非常に多くの武道愛好者がいる現状を考えると、武道は『世界遺産』として認識されるべき」⁶⁵⁾と説き、今こそ、武道を「固有の＝ユニーク」な文化としてではなく、「普遍的」なものと理解・把握すべき時だと主張している。このベネットの主張における「普遍的」なものは、日本独自の変わらざるべきものとしての「文化普遍主義」ではなく、武道や剣道において、日本人でなくとも世界中の誰が行っても理解し、体得しうるものを指している。これは、かつての笠原が案じた「剣道の日本の精神性が異国人に理解できるかが難しい」という懸念に対して、日本で生まれた武道文化を理解しようとする外国人に目を向け、外に出す勇気を日本人に対して訴えているものであり、文化普遍主義的に理解され実践されてきた剣道の文化摩擦と変容を想定した上での提言と言える

るだろう。

また、井上が『武道の誕生』⁶⁶⁾で明らかにしたように、そもそも武道は近代に「和魂洋才」型の文化として形成された。1930年代に「洋才」の側面を排除または隠蔽して「和魂」の側に大きく傾き、帝国主義思想へと傾倒し、戦争への邁進に利用された悲劇の歴史がある。その後、第二次世界大戦後のGHQ占領下では「洋才」に傾き、「民主化」「スポーツ化」による生き残りの段階を経て、その延長線上に現在の競技スポーツ化がある。つまり、もともと日本武道として「和魂」であった剣道が、戦後、西洋合理主義のもとで「洋才」を加味し、スポーツ化して現代の日本剣道 KENDO となった経緯がある。剣道は常にこの「和魂」と「洋才」の狭間で、「武道」なのか「スポーツ」なのかが問われ、振り子のようにバランスをとって存在してきた。この「和魂」と「洋才」のバランスを「ローカル」と「グローバル」という視点から捉え直すと、文化普遍主義は「ローカル」もしくは「ナショナル」と置き換えられ、文化相対主義は「グローバル」もしくは「インターナショナル」と置き換えることが可能となる。すなわち、この「和魂」と「洋才」のバランスを「文化普遍主義（ローカル）」と「文化相対主義（グローバル）」という視点から捉え直し、日本剣道 KENDO を現代にふさわしい形で再構築する必要があると考えられる。

3-3. 残すべき日本剣道 KENDO の思想

日本剣道 KENDO を再構築し、国際展開する現代剣道を構築するにあたって、剣道の本質についてここで確認しておきたいのは、日本剣道 KENDO の「文武両道」と「師弟同行」、及び「交剣知愛」という思想である。

日本的な「道」と呼ばれるものは、技と理法や、実践と理論を統一した概念を有している。この「文武両道」の思想は、中林によると、「文・武両者が各々別個にその肉体的な向上と

精神的な伸長をなした結果ではなく、文・武という教育的契機が一人の人間を武人としての自覚に導いた結果、その身につけられた武芸や教養がその人の人間的表現として行為化されたものとみることができる⁶⁷⁾ というものである。この文武両道の思想は、剣道だけではなく武道全般に、現在もなお貫かれている思想である。

次に「師弟同行」は、共に同じ道を志す同志として、1対1で身体と技をぶつけ合い、人格と人格の接触を伴って修養するという考え方である。特に剣道は、「師」が高齢になっても「弟」と剣を交えて、稽古をすることが一般的である。そのため剣道は生涯にわたって実践可能な身体運動文化といえる。恵士⁶⁸⁾は、剣道の取り組み方を三段階に分けている。まずは、「遊びの世界」で、剣道というものに触れ、その内に「競技の世界」に入り、選手権や各種大会を目標に競い合い、最終的には「修養・遊芸の世界」で自己の剣道とともに人間性や生き方を見つめ、昇段審査を糧としながら、後進の指導にあたり、最終的には「剣道の理念」に到達するといった自己陶冶を図ろうとするものである。

「交剣知愛」の意味するところは、『剣道と英辞典』⁶⁹⁾によると、「剣道を通して互いに理解しあい人間的な向上をはかることを教えたことば。稽古や試合で剣を交えた相手と、もう一度稽古や試合をしてみたいという気持ちになること。また、そうした気持ちになれるように稽古や試合をなささいという教えを説いたことば」とある。つまり、剣を交える相手は、敵ではなく、剣道を通じて人間形成を図ろうとする同志であり、互いに切磋琢磨しながら、老若男女や国籍を問わず、正面から正々堂々と相対し、竹刀を用いて互いの至らぬ箇所を指摘し合う場と捉えようする姿勢が問われている。そして、互いに剣道を通して稽古し、また試合で競い合いながら、相手に対する信頼と尊敬の念を基盤としたコミュニケーション能力が求められているのである。

これらは、「剣道が剣道たる所以」の思想である。つまり、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とする剣道の理念に立ち返り、剣道の技の修練をした人間教育に目的があるとする日本剣道 KENDO の精神性を保持することが求められる。

3-4. 日本剣道 KENDO の課題

～客観化（言語化）と審判員制度～

剣道の海外普及を目指すならば、必然的に「客観化（言語化）」が求められる。そもそも武道や武芸といった日本の伝統文化は「非言語」的な世界である。この世界では、心身のはたらきがすべてであり、「わざの実技を尊重し、そのための型や、その型の一部を記録した秘伝書が珍重され、そういう記録に記しえない微妙な演技の方法や美の様式などを、口伝として伝えることを、きわめて重大な文化伝承と考えてこれを実践した⁷⁰⁾という事実がある。そのため、オイゲン・ヘリゲルの『日本の弓術』⁷¹⁾に象徴されるように、「口伝」の世界である技は体得が必至となる。

剣道においても、技（技術）は習うものではなく、真似て盗むものであり、師匠が事細かに技を説明し、指導手順を示すものではなかった。しかし、武道が学校教育に導入され、そして海外に普及する過程において、「客観化（言語化）」が適切な理解と効率化のために必至となった。全剣連が2000年に出版している『剣道と英辞典』や、FIK 発行の『剣道試合・審判規則』英語版は、剣道の海外普及の「言語化」の顕著な例であろう。この「客観化（言語化）」は、日本剣道 KENDO の正統性を異文化社会において理解してもらうためにも、極めて重要な要因である。

また、剣道の技の洗練には、「審判員」の存在が欠かせないが、長尾が指摘するように、剣道の海外普及の過程において「審判員問題」⁷²⁾が顕在化している。剣道にはもともと公認審判

員制度がない。剣道の試合は、相手とのかけ引きの中で瞬間的に自己のすべてを技で体现するという武芸としての特性を有している。そして、この技を評価する審判員は、修練している高段者でなければ見極められないとする思想がある。このように、機械ではなく人が判断し評価する剣道の技に対する美学の追究は、武道の魅力であると同時に、客観性を重んじる競技スポーツとして弱点となる可能性もある。しかし、審判講習会と共に実施される審判員の実技者としての稽古会の意義もここで確認したい。

日本においては高段位者が下段位者の大会の審判員となるが、世界大会では形式的な公平性の観点からこのような方式は採用されることはない。例えば、日本対韓国の決勝戦で審判をするのは、日本と韓国以外の国の審判員ということになる。そして、「有効打突」を見極める能力の問題が世界大会の度に取り沙汰される。武道の一本の基準は、定量化・共通化は難しく、極度の緊張場面で瞬間的に決定される。特に剣道における「有効打突」の見極めは、客観的な評価が困難であり、審判員個人の主観的判断に拠るところが大きい。このことについては、三審制による客観性の保持を試みているが、根本的な解決には至っていない。そのため、審判員の能力保障のための国際的な公認審判員制度などの確立が求められるとともに、異文化を背景とする審判員が正確な有効打突の判定を行うことができるように、有効打突の構造分析と客観化が求められている。

おわりに： 日本剣道界の異文化理解に向けて

日本剣道 KENDO への理解を他の異文化の人々に求めるのであれば、日本人自身の異文化理解への努力、もしくは異文化への配慮が必要であろう。これまでみてきた韓国剣道 KUMDO との宗主国論争について言えば、その背景に

は、日韓の歴史的事情があった。同じ身体運動であるはずの剣道 KENDO が、多くの国々で、日本の身体運動文化として尊重される一方で、韓国の人々からは、似て非なるもの、或いは、反日や克日の対象として捉えられる事実があった。さらに、近年の韓国剣道 KUMDO の競技力の向上及び、オリンピック競技化を視野に入れた独自の国際組織の展開という現実が存在する。

これらの事情にどのように対処していくのが、今後の日本剣道 KENDO の国際展開にとっては重要である。日本剣道 KENDO の本質を保持した上で、異文化理解に基づく剣道の再構築が求められている。さらに、剣道は人間形成の道であり、勝負にこだわる競技性だけに留まらないことを明確にし、日本剣道 KENDO の特質であり、FIK 発足時の意義である「交剣知愛」の精神を遵守する必要がある。実際に、WKC で韓国チームが躍進し、日本チームとの競技力差が拮抗した状況になってからは、互いに「交剣知愛」の精神を忘却の彼方へ追いやってしまった。

以上のように、近年の韓国剣道の台頭状況を踏まえつつ、全剣連が剣道 KENDO の国際展開を志向するとき、これまでの曖昧な国内認識のままの「剣道の海外普及」ではなく、異文化への配慮を前提とした、剣道の思想の伝承、剣道技能・審判の客観化（言語化）という視点からの日本剣道 KENDO の再構築による現代剣道の構築が不可避となるであろう。

付 記

なお本研究は、平成 24 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) 課題番号：24500714、研究代表者：小田佳子）の助成を受けて実施された一部である。

注および参考・引用文献

- 1) 坂上康博編著（2010）海を渡った柔術と柔道、東京、青弓社、p. 9.

- 2) 坂上康博 (2010) 同上書, pp. 287-289 .
- 3) 全剣連では, 「剣道の国際化」について, 敢えて, 「剣道の国際的普及」という用語を用いている. この「国際的普及」の意味するところは, スポーツの「国際化」に代表されるオリンピック競技化や国際的普遍性を意味する競技化とは異なり, あくまでも, 日本文化としての剣道への理解とその普及に努める姿勢を示している .
- 4) 平川信夫, 須郷智 (1982) 外国人剣士の剣道観に関する調査研究, 武道学研究 . 15 (2), pp. 43-44 .
- 5) 平川信夫 (1988) 外国人剣士に関する調査研究, 武道学研究, 21(2), pp. 11-12 .
- 6) 太田順康 (1989) 剣道の意識に関する研究 - 欧州剣士を中心に -, 武道学研究 . 22 (2), pp. 53-54 .
- 7) 太田順康, 鎌倉洋志 (2008) 剣道の国際的普及の現状と課題についての一考察 - 世界剣道選手権大会・ヨーロッパ剣道大会の発展経過を通して -, 大阪教育大学紀要, 第 57(1), pp. 55-75 .
- 8) 植原吉朗, Alexander Bennett, Michael Komoto (2005) 剣道の国際的普及に伴う文化性・競技性の認識変容に関する国際調査の試み, 武道学研究 . 第38巻 . 別冊, p. 10 .
- 9) 塩入宏行, 石井均 (1990) ヨーロッパにおける剣道家の昇段実態, 武道学研究 . 22 (3), pp. 33-37 .
- 10) Honda, S. Dodd, I. P. (2004) Teaching Kendo within the English University Curriculum, 武道学研究 . 37(2), pp. 35-45 .
- 11) Honda, S. (2006) Kendo at Secondary Schools in the U. K. : Development of School Kendo in Gloucestershire, 武道学研究 . 39(1), pp. 23-33 .
- 12) Honda, S. (2007) Kendo within A Spanish University Curriculum, 武道学研究 . 40(2), pp. 51-61 .
- 13) Honda, S. (2009) A Study of Logistical Issues with Refereeing in the Internationalization of Kendo -with the focus of the European Kendo Championships-, 武道学研究 . 41(3), pp. 1-11 .
- 14) 阿部哲史 (2005) 武道における文化摩擦, 山田奨治, アレキサンダー・ベネット編 (2005) 日本の教育に武道を: 21世紀に心技体を鍛える, 東京, 明治図書, pp. 198-217 .
- 15) アレキサンダー・ベネット (2005) 剣道の黒船 - 韓国: 剣道の国際普及とオリンピック問題, 山田奨治, アレキサンダー・ベネット編 (2005) 前掲書, pp. 336-359 .
- 16) 福本修二 (2008) 剣道の海外普及の現状と今後の課題について, 第40回記念大会シンポジウム, 武道学研究 . 40(3), pp. 57-60 .
- 17) 志々田文明 (2008) 武術・武道の『国際化』と文化変容に伴う諸問題, スポーツ科学研究 . 5, pp. 197-211 .
- 18) 長尾進 (2009) 剣道における国際化の問題を考える, 現代スポーツ評論 21, pp. 52-60 .
- 19) 金炫勇 (2010) 韓国剣道ナショナルチーム選手の剣道に対する意識 韓国剣道大学選手との比較から, 広島大学大学院教育学研究科紀要 . 第二部 . 59, pp. 345-352 .
- 20) 井島章, 岩切公治, 井上哲朗, 朴東哲 (2000) 韓国における剣道の意識調査 韓国及び日本の大学生を比較して, 国際武道大学紀要 . 16, pp. 191-196 .
- 21) 岩切公治, 井島章, 井上哲朗, 朴東哲 (2000) 韓国における剣道の実態調査, 国際武道大学紀要 . 16, pp. 213-217 .
- 22) 加藤純一 (2009) 韓国から見た剣道の国際化, 日本武道学会剣道専門分科会会報: ESPRIT 2008 年度版, pp. 17-18 .
- 23) 安藤亜紀 (2011) 韓国における学生剣道に関する研究, 平成22年度金沢大学教育学部スポーツ科学課程卒業論文 .
- 24) 青木保 (1999) 「日本文化論」の変容, 東京, 中央公論新社, pp. 35-36 .
- 25) アレキサンダー・ベネット (2005) 前掲

- 書, p. 340 .
- 26) ソ・ピョンユン (大韓剣道会専務理事) 「コムド (kumdo) とケンドー (kendo) についての多くの質問に対して」, <http://members.at.infoseek.co.jp/koreanwatcher/docs/kumdownakendo.htm> (2011. 08. 15) .
- 27) (財) 全日本剣道連盟公式 HP 「剣道の起源に関すること, 剣道の起源についての考え, 剣道の歴史」 <http://www.kendo.or.jp/kendo/history.html> (2011. 08. 15) .
- 28) 1910年8月から1945年8月までの「韓日合那条約」集結による, 大日本帝国の朝鮮半島における武断統治の期間を指す。帝国主義を前面に押し出した日本の韓国 (北朝鮮を含む) における植民地支配であった。
- 29) ここでは, 歴史修正主義の意味で用いる。伝統的な歴史解釈に対して別の可能性 (仮説) や, 可読性 (読み方) を提示する試みを示す。
- 30) アレキサンダー・ベネット (2005) 前掲書, p. 338 .
- 31) 朴貴順 (2012) 日帝強占期学校体育の武道に関する研究 - 柔道と剣道の教科目導入を中心に -, 楠戸一彦先生退官記念会 (2012) 体育・スポーツ史の世界: 大地と人と歴史との対話, 広島, 溪水社, pp. 243-258 .
- 32) 金炫勇 (2010) 前掲書, p. 345 .
- 33) 亜細亜文化社 (1904) 舊韓国官報2942號 號外, 東京: 国立国会図書館所蔵 1904. 9. 27, p. 36 .
- 34) 大韓體育會 (1965) 大韓體育史, ソウル, p. 61 . 31)より再引用。
- 35) 朴貴順 (2012) 前掲書, pp. 253 .
- 36) 朝鮮總督府 (1914) 朝鮮總督府官報 號外, 東京: 国立国会図書館所蔵 1914. 6. 10, pp. 200-201 .
- 37) 大韓體育會 (1965) 大韓體育史, ソウル, p58 . 31)より再引用。
- 38) 朴貴順 (2012) 前掲書, pp. 254-257 .
- 39) 大韓剣道会 (2010) 第39回全国学生剣道大会プログラム, pp. 39-41 .
- 40) 日本武道館 (2007) 日本の武道, 東京, 三友社, p136. 及び, 第5章資料編 武道近代140年のあゆみ, p. 483 を参照のこと。
- 41) 日本武道学会・剣道分科会編 (2009) 剣道を知る事典, 東京, 東京堂出版, pp. 264-268 .
- 42) アレキサンダー・ベネット (2005) 前掲書, p. 339 .
- 43) 日本で重んじられている礼法の1つである蹲踞について, 中村民雄 (今, なぜ武道か (2007) 日本武道館, 東京, pp. 121-122 .) の指摘によれば, 明治39年 (1906) に大日本武徳会が剣術形を制定した時, 礼式は警察礼式の立礼を採用し, 蹲踞礼をとらなくなった。ここに, 蹲踞は礼式とは区別されることとなるとあり, 当時の様式がそのまま残っている可能性も考えられる。
- 44) 加藤純一 (2011) 韓国剣道の現状 審判の判定に対する映像判読訴願の導入, 武道学研究. 第44巻. 別冊, p. 17 .
- 45) 安藤亜紀 (2011) 前掲書, p. 85 .
- 46) 福本修二 (2008) 前掲書, p. 57 .
- 47) 高橋亨 (2009) 日本武道学会/剣道専門分科会11 国際剣道連盟, 剣道を知る事典, 東京, 東京堂出版, p. 169 .
- 48) 現在, FIK では, 加盟国や地域の区割りが問題となっている。つまり, 今後, 中近東, 西アジアのどこまでをヨーロッパゾーンに含めるか。南アフリカがヨーロッパゾーンに所属しているが, アフリカをどのように扱うかという問題が指摘されている。
- 49) 高橋 亨 (2009) 同上書, p. 169 .
- 50) この点について, 筆者が3回に渡り全日本剣道連盟 (国際剣道連盟) を訪問し, 事務局の方にインタビューを実施したところ, 次のような回答を得た。GAISF (現Sport Accord) への加入の意図は, 当初は本意ではなかったが, 剣道が KENDO というもの

ではない武道 BUDO 等の総称の中に入れられたり、韓国剣道 KUMDOなどの別の用語で国際認証されたり、他の組織団体の傘下とならないようにするためである。この背景には、毎度、実態の分からない国際武道組織団体などに地位が脅かされる様な状況が増えていることがある。

- 51) 2011年11月現在、国際剣道連盟所蔵の世界剣道選手権大会パンフレットおよび、月刊誌『剣道日本』、『剣道時代』の各号の世界剣道選手権大会関連記事からデーター抽出し、小田が作成した。なお、第1～13回大会までの参加国・地域および参加者数については太田ら（2008）前掲論文の報告に従った。
- 52) 長尾進（2009）前掲書，pp. 55-56。
- 53) 韓国で世界剣道連盟設立，（2002）月刊剣道日本．4月号．スキージャーナル，p. 88。
- 54) 志々田文明（2008）前掲書，pp. 197-211。
- 55) 金炫勇（2010）前掲書，p. 345。
- 56) 植原吉郎（2009）日本武道学会／剣道専門分科会14剣道はオリンピック種目になるのか？，剣道を知る事典，東京，東京堂出版，pp. 174-175。
- 57) 塩入宏行（1992）剣道の国際化を考える，全国教育系大学剣道連盟，ゼミナール現代剣道，東京，窓社，p. 250。
- 58) 笠原利章（1981）剣道国際化の現況と未来像，月刊剣道日本．4月号．スキージャーナル，pp. 42-44。
- 59) 日本以外で独自に高段位審査を実施している国は、現在、韓国と台湾である。全剣連は韓国国内で展開されているKUMDOの普

及や大会運営・規定などに対して容認する立場をとっている。これまでの韓国における剣道普及の経緯から、日本剣道と他の国の剣道を共に認め合うという「文化相対主義的な方向性」の姿勢も保持しているといえる。

- 60) 坂上康博（2011）柔術と柔道の伝播をめぐって，武道学研究，第44巻，別冊，p. 4。
- 61) 長尾進（2009）前掲書，pp. 55-56。
- 62) 長尾進（2009）前掲書，pp. 59-60。
- 63) 三橋秀三（1972）剣道，東京，大修館書店，p. 20。
- 64) 阿部忍（1984）体育の哲学的探究，東京，道和書院，pp. 170-171。
- 65) アレキサンダー・ベネット（2011）武道の『固有性』と『普遍性』，武道学研究．44巻別冊，p. 5。
- 66) 井上俊（2004）前掲書，pp. 186-188。
- 67) 中林信二（1994）武道のすすめ，東京，島津書房，p154。
- 68) 恵土孝吉（2007）剣道の科学的上達法，東京，スキージャーナル，pp. 274-276。
- 69) 全日本剣道連盟編（2011）剣道和英事典，東京，pp. 59-60。
- 70) 西山松之助（1972 / 1982）近世芸道思想の特質とその展開，日本思想体系 芸道論，東京，岩波書店，pp. 588-589。
（全日本剣道連盟編，2011，pp. 59-60。）
- 71) オイゲン・ヘリゲル述，柴田治三郎訳（1982/1999）日本の弓術，東京，岩波文庫。
- 72) 長尾進（2009）前掲書，pp. 55-56。

受付 2012年3月8日

受理 2012年9月24日